

【書評】

呉敬璉

『呉敬璉 中国経済改革への道』

(バリー・ノートン編・解説, 曾根康雄監訳)
NTT出版, 2015年3月, 350ページ+iv。

本書は, Barry Naughton (バリー・ノートン) が編集した *Wu Jinglian: Voice of Reform in China* (MIT Press, 2013) の中から, 日本の一般読者に中国のことをより深く理解してもらうために有用と思われる16本の論文, および編者による長いインタビュー・解説 (全ページの3割近く) を翻訳したものである。ノートン氏はカリフォルニア大学サンディエゴ校の教授であり, アメリカにおける現代中国研究の第一人者である。一方の呉敬璉 (Wu Jinglian) は政府系シンクタンク・國務院発展研究センターの研究員を長年務めた著名な経済学者であり, 85歳を超えた高齢でありながら, 社会に大きな影響力を持つ現役の言論人でもある。

本書に収録された論文は, 呉敬璉が1988年から2010年にかけて公表した数多くの著書, 論文, エッセイの中から, ノートンが自らの基準で選んで編集したものであり, 必ずしも呉の代表的な業績, あるいは, 中国経済および中国経済学に関する呉の考えを体系的に反映したものでもない。市場経済, 市場と政府の関係, 民主主義と憲政などに深い理解を示しながらも, 共産党政府の政策決定に長年関わった稀有の中国人経済学者の声をアメリカなど西側の読者に伝えることに主な狙いがあるようだ。とはいえ, 激動の時代を生き抜いた伝統的な中国知識人の人間像を描き, その思想の軌跡を各時期の研究業績を通して辿るという本書の構成に大きな魅力を感じる。本書を読みながら, 筆者自身も注視してきた改革開放の諸段階, およびそれぞれの展開過程における主要な問題や研究課題が頭脳に浮び上がり, 改革開放に対する呉の非常な情熱も強く感じられる。

1. 本書の構成と概要

本書は4つのパートで構成され, 各パートの

冒頭にノートンによる解説が加わっている。その構成は以下の通りである。

第1部 現在の課題: 中国の改革からどのような21世紀型経済が現れるのか?

第2部 自叙伝: 社会的に献身した知識人コミュニティの数世代に跨る歴史

第3部 中国の経済改革を設計する

第4部 改革アジェンダを拡大する

第1部は, 呉敬璉に対するノートンの長いインタビューに始まり, 2000年代以降改革が減速した原因として, 好調な経済成長が更なる改革の必要性を減退させたこと, 政府の機能転換が不十分で強力な利益集団が形成されたことが指摘され, 成長方式の転換, そのための制度改革が欠かせないという内容である。続く第2章では, 経済改革が30年を迎えた2008年に, 改革ビジョンの設定に関わった呉は, まず改革が開始された1970年代末の時代背景を明らかにし, 経済改革を「双軌制」の形成 (1978~83年), 体制改革目標の模索 (1984~93年), 社会主義市場経済の確立 (1994年~) という本質の異なる時期に分けて独自の見解を示し, さらに, 中国が直面する腐敗や格差といった難問を解決すべく立憲, 民主, 法治を最終目標とする政治改革も推進されなければならないと力説する。残りの各章で, 改革をめぐる社会勢力のスタンス, 過大な所得格差への対処法, 蔓延る腐敗の制度的要因が分析され, 富強な大国へ進む中, 市場経済制度, 法の支配, 立憲民主, さらに思想の自由と学術の独立を実現する必要があると主張する。いずれの文章も2007年ごろ発表されたものだが, 扱われているテーマは今日も中国を悩ませているものばかりである。

第2部は呉敬璉の自叙伝となっているが, 実業家を母にもつ呉の生い立ちや自らの経済観の形成過程も興味深い。ノートンによる詳細な「はしがき」から「呉市場 (ミスター・マーケット)」という偉大な経済学者の出現を知ることができる。

第3部は, 経済改革の設計に深く関わった呉敬璉の代表的な論文2篇 (英語版では10篇) およびノートンの解説から構成されている。1つは1988年5月に国家改革発展委員会の求めに応じて作成された「経済体制中期 (1988~1995) 改革計画綱要」の概要であり, もう1つは1993

年6月に第14期三中全会（7月）起草グループに提出された「短・中期経済体制改革の包括的設計」である。ノートンも指摘したように、1989年6月の「天安門事件」が影響して前者の「改革計画綱要」は指導者に採用されなかったが、社会主義市場経済を経済改革の目標とする方針が決定された第14回党大会（1992年10月）を背景に、後者の統合的な改革提案はほぼそのまま採用され、多くの具体的な制度改革はいまだ進行中であるという。

第4部は英語版の1篇を除いた下記の5篇で構成される。すなわち、「我が国の証券市場構築の大計（1995年8月）」、「株式市場の何が問題なのか（2001年3月）」、「企業における党組織の役割の改善（1993年5月）」、「公開・透明で責任を問えるサービス型政府の構築（2003年6月）」、「憲法改正と憲政実施の要点（2003年6月）」。「ノートンの解説によれば、これらの論文は、政策アドバイザーの立場から離れた呉敬璉が学術的志向で執筆したもの、あるいはマスメディアを活用し一般読者に語り掛けたものが多い。呉は言論人として経済問題の域を超え、政治改革、民主、憲政など中国では割合敏感な問題についても積極的に発言したのである。

2. 呉敬璉と中国経済学

改革開放以来の中国では、経済学は各レベルの指導者、マスメディア、一般大衆に大きな影響力を持つ社会科学の地位を確立しており、著名な経済学者の発言は改革の方向性や株価の動きにも影響を及ぼすこともしばしばあった。そうした中でも、呉敬璉は誰しも認めるスーパースターの存在である。ノートンの執筆した序論、および各部の冒頭に付した解説からそのようなイメージが浮かび上がる。

呉敬璉の研究業績は中国経済のほとんどあらゆる分野をカバーするが、その底流にあるものはここ30余年間ほぼ一貫している。その1つは市場システムによる資源配分の効率性への揺るぎない信念である。マルクス主義経済学を学び、改革開放初期までの長い間中国社会科学院で計画経済を研究した呉だが、イェール大学での短い研究生生活（1983年1月からの1年半）を終えて帰国した後は、いわゆる近代経済学に傾倒し、その基本的な考えを中国の様々な改革に応用し

ようとし、そして、高度成長が続く中、「中国経済学の泰斗」という地位を築き上げた。まさしく「時勢造英雄」の典型といえる。

いま1つは政府と市場の健全な関係の構築、公平公正な市場経済を保証するための法治、権力腐敗の抑制に必要な民主主義への固い執着である。経済は政治や社会に関わる1つの複雑なシステムである以上、経済改革も必然的にそれ自体の統合的な改革と並行して、政府の機能転換、法治の徹底も欠かせないと説く。2010年に、呉敬璉・周小川・郭樹清は「整体改革理論」、すなわち改革を全体的に推進しなければならない一方で、比較的突破しやすい部分的な課題を1つずつ解決していくという漸進的改革論の形成に大きく貢献したとして、「中国経済理論創新賞」を授与されたが、まさに呉のそうした業績が評価されたのであろう。

ノートンも繰り返すように、呉敬璉は国務院発展研究センターに身を置いて党政府の最高指導者に直接進言できるというインサイダーでありながら、学問的な中立の姿勢を貫きアウトサイダーとしての発言も積極的に行った。固い信念に裏打ちされたそのブレない姿勢は体制内と体制外の双方から絶大なる信用を得ることができたのである。

近代経済学を理解しそれを最高指導者も受け入れられる言葉で具体的な改革提案に盛り込むという行いは、呉敬璉世代ならではの能力であろう。資本主義市場経済の中で暮らす者からみれば、彼の語った企業改革や政府の機能転換、財政・金融政策などは近代経済学の教科書で書かれている当たり前の議論も多い。不謹慎な言い方だが、呉は市場経済に関する理論と政策の中国改革への応用に努めた、いわば伝道師のような存在ともいえよう。ノートンが呉のことを高く評価しているのも、彼が市場経済、民主主義、憲政といった西側の価値観を懸命に唱道する姿勢と関係するのかもしれない。

実に、いわゆる中国経済学は非常に豊富な内容をもつ。2008年に創設された「中国経済理論創新賞」は2015年で7回を数えるが、受賞した理論を順にあげると以下の通りである。「農村家庭聯産承包責任制理論（杜潤生ら）」、「国有企業股份制改革理論（厲以寧ら）」、「整体改革理論（呉敬璉ら）」、「価格双軌制理論（張維

迎ら)」、「中国経済結構調整理論(馬建堂ら)」、「財政信貸綜合平衡理論(黃達ら)」、「過渡経済学理論(林毅夫ら)」。ほかにも多くの研究分野があり、優れた研究者および研究業績も多く挙げられるべきだろう。いわゆる中国経済学は呉敬璉はじめ、同時代を過ごした無数の識者がそれぞれの役割を果たして形成されたものであり、様々な奏者が共演した交響曲のようなものである。

ノートンの描いた経済学者であり言論人である呉敬璉のイメージを補強するため、ここで中国知網の検索システムを利用して呉の全体像を示したい。1980年から2015年までの35年間、学術雑誌や一般向けの大衆誌に掲載された呉の論文数(一部は共著)は949本に上るが、年平均でみると、1980～89年が6本、1990～99年が21本、2000～15年が43本と急増してきたことが分かる。各種新聞で発表された署名文書については2000年以降のデータしかないが、これも年平均で15本を数える。特に注目したいのは、学界への影響の度合いを測る論文の被引用回数の多さである。被引用回数トップ100の論文は1987～2013年の間に発表されたものであり、1本当たりの被引用回数は41回にも達する。被引用回数トップ10の論文が発表された雑誌は、『宏观経済研究』、『改革』、『经济社会体制比較』、『管理世界』、『経済研究』、『領導決策信息』、『中国改革』、『学術月刊』、といった影響力の大きいものばかりである。被引用回数トップ3(2016年6月27日現在)は、それぞれ「農村余剰労働力の移動と三農問題」(539回)、「制度と技術の関係」(240回)、「経路依存と中国改革」(206回)をメインテーマとした論文であり、被引用回数が100ぐらいまでのトップ10はそれぞれ、企業の統治機構、中小企業の発展戦略、工業化への道、政府の機能、金融改革、腐敗の退治と幅広いテーマに及んでいる。

呉敬璉は改革開放の時代が生み出したスーパースターであり、後進に真似の許されない特殊な存在といっても過言ではない。中国のことも西側の読者の思考も熟知する大家・ノートンだからこそ、最高指導者のブレンでありながら、経済学者としても言論人としても現代中国に大きな影響を与え続けてきた呉の人間像が見事に

描き出せたのであろう。上述した呉の全体的業績を踏まえたうえで本書を読むなら、呉のことをより多面的に知ることもできる。訳本と思えないほどの読みやすさもあり、中国研究者はもちろん、一般読者にも本書を強くお勧めしたい次第である。

参考文献

- 呉敬璉『現代中国の経済改革』(青木昌彦監訳、日野正子訳) NTT出版、2007年。
 Wu Jinglian (2016) *Whither China?: Restarting the Reform Agenda*. Oxford University Press.
 呉曉波(2010)『呉敬璉伝：一个中国経済学家的肖像』中信出版社。
 呉敬璉(2001)『当代中国経済改革』上海遠東出版社。
 呉敬璉(2006)『中国増長模式抉抉』上海遠東出版社。
 呉敬璉・馬国川(2013)『重啓改革議程：中国経済改革二十講』三聯書店。

巖 善平(げん・ぜんへい 同志社大学大学院 グローバル・スタディーズ研究科)

【書評】

堀口正著

『周縁からの市場経済化

—中国農村企業の勃興とその展開過程—

晃洋書房、2015年6月、VI+215ページ

本書は、著者が1990年代後半から2000年代初頭にかけて、上海浦東新区(旧・川沙県)合慶鎮と江蘇省常州市武進区鄒区鎮(旧・ト弋鎮)において実施した農村企業調査の成果を総括したものである。著者は、徹底したフィールドワークと一次資料の収集を通じて、郷鎮企業の前身である社隊企業の勃興期(第I部、農村企業の勃興)と1990年代以降の郷鎮企業の所有制改革期(第II部、農村企業の展開過程)、という2つの重要時期に焦点を当てながら、長江下流域の上海や江蘇省南部地域における農村企業